守るために活動した女性たちのことも大きく取り上げられています。

第三世界の女性たち 対等なパートナーとして

最後の中学生用「ブック6」では、広く世界へ目を向けて、男尊女卑がいまだに根強い社会の中で苦しむアジア・アフリカ・南アメリカの女性たちについて書かれています。しかし、先進国の価値観の方が優れているという自国中心主義ではなく、異文化に対しての理解と尊重の姿勢の大切さを強調しています。保護が必要な同情すべき人たちという優越感と背中合わせの見方ではなく、困難な中でも社会を良くするために闘っている女性たちを積極的に取り上げ、同じ時代を共に切り開いていくパートナーとして、敬意を込めて描いています。

もしかしたら最大の異文化であるかもしれない女性と男性の間に、このような対等なパートナーとしての関係が紡ぎだされたら、一人一人がどんなに生きやすい社会になることでしょう。

メディアとしての教科書

このように、『男女平等の本』の男女平等への視点はいわゆる男女差別の問題にとどまりません。人権問題も、文化の違いの問題も、平和の問題も、社会で他人と共存して生きていくために学ばなければならないあらゆることが、男女平等の視点と共にとりあげられています。

「エガール」前号に、「メディア・リテラシー」が特集されていましたが、教科書は子どもたちにとって、(時にはテストという強制力を持って迫る)大きな影響力を持っているメディアです。残念ながら、日本には真の意味での男女平等の視点を持った教科書はほとんどないのが現状です。困難な問題が山積(さんせき)する現在、「男女平等」がその解決のためのキーワードであるという考え方は、今や国際的な潮流です。経済大国ではあっても男女平等の点では他の先進国から大きく遅れをとっている日本にこそ、『男女平等の本』のような総合的に男女平等を学べる教科書が作られ、子どものうちから男女平等について学べることが、早急に必要とされています。それが、どんな人にも住みやすい豊かな社会作りにつながる事と思います。

筆者プロフィール

荒川ユリ子

ノルウェー『男女平等の本』を出版する会・代表、「ジェンダーに敏感な学習を考える会」メンバー。東京都立大学理学部数学科卒業後、中学高校の数学教師を経て退職。1991年、ノルウェーで小中学校用テキスト『男女平等の本』(全8巻)に出会い感銘を受け、日本への紹介を企画。

著書

「ジェンダーセンシティブからジェンダーフリーへ」共著
すずさわ書店　2001年
「男女共同参画と学校教育」共著　教育開発研究所　2002年

『男女平等の本』
教師用指導書(上・下)